

創業者研究へのアプローチ —創業者の海外書籍収集を中心に—

池田 貴久

はじめに

1. 池田大作著作翻訳出版目録・創業者著作「翻訳書籍1000冊」展
2. 創業者の全著作目録作成への取り組み
3. 170の名誉学術称号に関する記録の整理
4. キャンパス内の名称調査
5. 『新・人間革命』『創価大学』の章に関連して

おわりに

はじめに

創価教育研究センターは、本学創業者の足跡や世界からの評価を正確に伝えるため、また今後世界的に行われるであろう池田研究に資するため、さらには学生を中心とした様々な方へのレファレンスの実現のために、関係資料の収集・整理に努めている⁽¹⁾。その収集範囲は「創業者・池田大作先生に関係するもの全般」であり、揮毫、著作、研究書、視聴覚資料、物品など多岐にわたる。現在は、収集したものを記録するためのシステム（所蔵データベース）や収集していくために必要となってくるシステムを組み上げている段階であり、このシステムの確立が次の大きな課題となっている。また、創価大学におけるアーカイブズという観点に立ち、今後必要となってくるであろう開学以来から現在に至る歴史を残していくための作業にも同時に取り組んでいる。どちらも根気のいる作業ではあるが、創業者の精神を正しく次代へと伝えていくためには何よりもまず正確さを重視しなければならない。

実際どのような蓄積をしているのか、平成15年10月から16年3月にかけての当センターの取り組みの一端として、5点の項目を紹介させていただく。

1. 池田大作著作翻訳出版目録・創業者著作「翻訳書籍1000冊」展

創業者の著作は、書籍として出版されたものだけでも膨大な量があり、すでに絶版になっているもの、装丁が変わっているものなどを含めると、その全容を把握することは容易ではない。その中には海外において出版されている翻訳書籍も多数あり、その広がりには現在33言語、44カ国・地域へと広がっている⁽²⁾。完全な創業者著作目録の作成を目指し、その第一歩として選び、取り組んだのが翻訳書籍であった。

当センターにはもともと、寄贈等による翻訳書籍が何百冊もあり、情報収集の傍ら、それらを活用できるようその整理にあたった。当センター内で一番広いスペースである会議室に翻訳

Takahisa Ikeda (センター職員)

書籍を並べ、所蔵書籍の現状を把握するだけの作業であったが、創業者著作の翻訳書籍の全貌にほど遠いにもかかわらず、多数の言語が対象となる。その作業は、非常に時間のかかるものとなった。関係機関からいただいた情報を集約していく中で、当初の予想をはるかに上回る種類・冊数の翻訳書籍の存在がおぼろげに姿をあらわしはじめた。また、増えた情報からさらに新たな情報にも気付くことができ、到達点が不明である取り組みが本格的にスタートしていくこととなった。

翻訳書籍自体の収集に関しては、本当に多くの方の協力をいただいた。書籍を寄贈していただいた方々、もともと数が少ない非売品などの理由を持つ書籍の収集に尽力して下さった方々、翻訳出版された国へ行く機会のある学生等、当センターの取り組みに共感して下さる多数の方々との出会いも生まれた。その結果の一端を、当センターの研究紀要である『創価教育研究』第3号に「創価教育研究センター所蔵 池田大作著作翻訳出版目録(1)」として、31言語39カ国・地域の771冊を収録した。目録は翻訳されているままの言語によって作成した。そのためのデータ入力やチェック等で、留学生をはじめ多くの方の力を貸していただくこととなった。本号には、新たに所蔵した翻訳書籍を「創価教育研究センター所蔵 池田大作著作翻訳出版目録(2)」として収録している⁽³⁾。今回も多くの方の協力をいただいたことは言うまでもないことであり、支援して下さる方々の存在なくしてはここまでの完成を見る事がなかった目録である。

作業を進めて行く中で、その量が持つ存在感や当初の予想を遥かに上回る冊数などを学生はじめ多くの方にも知っていただきたいと考え、この翻訳書籍を展示するという発想を持ち始めていた。2003年の10月29日、創業者が当センターを訪問される機会があった。創業者は実に丹念に各所を見られ、その際、作業途中であった翻訳書籍もご覧になられた。その場での語らいを契機に、「創業者著作『翻訳書籍1000冊』展」の企画が始動していくこととなる。

2004年1月10日、創業者はロシア連邦サハ共和国の北極文化芸術国立大学より「名誉教授」称号を授与され、これが150番目の名誉学術称号となった。ささやかながらそのお祝いとして、2004年3月19日の創価大学第30回卒業式・創価女子短期大学第18回卒業式より「創業者著作『翻訳書籍1000冊』展」を開催することを決定し、一般公開期間は新入生入学後の4月上旬から中旬に設定した。

しかし『1000冊』展と銘打ったものの、2004年1月の段階では約700冊を数える程度であった。ひとつの目標を設け、そこへ向けてのピッチを上げた収集作業の甲斐あって、3月19日の卒業式の段階では無事1000冊に到達することができ、一般公開である4月6～18日の期間には、約1100という冊数を展示することができた。

展示の内容としては、1000冊を超える数の翻訳書籍を言語別に収めた展示ケースで全体の流れを作り、展示スペース中央には当センターが所蔵する翻訳書籍の中で複数冊あるものを置いた。これは来場者が直接書籍を手にとることができる閲覧コーナーをとして設けた。その他には、把握している情報をもとに、世界地図上に出版国・地域別に何冊出版されているかを示した一覧や、創業者に対して名誉学術称号を授与した各国の150の大学・機関の所在を示した地図などを展示した。また、展示会場の一角には、「池田文庫特別展示—創業者所蔵の国内外の著者寄贈書籍—」と題した併設展も設けた。

一番多くの種類があった言語は、アメリカ合衆国・マレーシア・日本・イギリス・フィリピン・インド・カナダから出版された計357冊の英語版書籍であった。次いで、台湾・香港・マレーシア・中国・日本・シンガポールから出版された計276冊の中国語版書籍であった。しかし、

これらはあくまで当センターで所蔵している冊数であり、全貌は把握できていない。現に、7月から「『翻訳書籍1300冊』展」としてリニューアルした段階では、それぞれの冊数が変動している。閲覧コーナーには、当センターに複数冊あるものから出展した。そのため全種類とまではいかなかったが、同じページ数であるにも関わらず本の厚みが全く異なるような紙質の違いなど、ケース越しでは分からないことを体感することができた。大学という場所柄、学生たちに各国・地域の書籍に触れてもらうことで、世界を少しでも身近に感じてもらえれば、ということも考慮してのコーナー設置であった。世界地図を使用した「出版国・地域一覧」では、各国・地域で出版されている翻訳書籍の冊数とともに、その地で最初に出版されたと思われる書籍も紹介した⁽⁴⁾。併設展である「池田文庫特別展示」とは、創価大学中央図書館内に所蔵されている池田文庫の中から、創立者宛に寄贈され、著者直筆のメッセージが添えられている書籍を15点ほど展示したコーナーである⁽⁵⁾。

展示期間は、2004年3月19日の卒業式、3月21日のオープンキャンパス、4月1日の創価大学第34回入学式・創価女子短期大学第20回入学式と、4月6～18日の計19日であったが、幸いにも好評をいただいたので、さらに展示期間を延長することとなり、この期間が結果的には第1シーズンという形になった。開催場所は創価大学内の記念講堂の1階ロビーを使用した。実際は地下に近い場所に位置しているため、資料保存の観点から湿度の高い梅雨の時期の展示開催は避けた。出展した書籍が創立者著作の翻訳書籍の全てを網羅しているわけではないが、これだけの冊数が揃っている場所は他にはなく、また、当センターとしても1冊しか所蔵していない書籍もあったためである。梅雨を避け再開の準備をしている間にも書籍は増え続けていたために、第2シーズンの初日である7月19日のオープンキャンパスからは、「創立者著作『翻訳書籍1300冊』展」として再スタートする形となった。そして、8月12、17日の通信教育部夏期スクーリング、8月22日のオープンキャンパス、8月27～29日の夏季大学講座、9月19日のオープンキャンパスの計8日で終了を迎えた。この間、サマースクールで創価大学を訪れた東京創価小学校の5年生や、創立者著作を数多く中国語に翻訳されている卞立強先生など、様々な方から見学の希望をいただいたため、一般公開日以外にも展示会場を開く機会があった⁽⁶⁾。

東京創価小学校の5年生の中には、授業の英語だけでなく、個人的にスペイン語やハンガリー語などを学んでいる児童もいた。展示を観ている最中は、文字に対して「絵みたい」「ぜんぜん読めない」など感想を述べつつ書籍を手にとっていたが、後日、若井東京創価小学校長からお電話をいただき、「英語と、もうひとつ挑戦したい」という感想を持った児童が多かったという話を伺った。好奇心旺盛な子どもたちだからこそ、少しのきっかけからでも世界を身近に感じていただけたようである。

卞立強先生には、「創立者の書籍を翻訳されようとしたきっかけはなんですか？」という質問をさせていただいた。すると、「30年前に北京大学の日本語学科にいたときに池田先生にお会いしました。1974年です。池田先生にとっては第二次訪中の時だと思います。先生は学生や私たちと一緒に食事をしてくださり、手品も見せてくださいました。先生は青年をとてとても大事にしてくださっていたと思います。今、創価大学は学生のための大学と謳っておりますが、まさに私がお会いした時からずっと、池田先生は青年を大事にされているのだと感じます。その時の先生の人格的魅力がとても印象に残り、その後先生が北京大学に寄贈された本を読み、感動し、翻訳したいと思いました。今、私は71歳です。中国語への最初の翻訳となった『私の履歴書』を訳したのは1980年代でした」と、語っておられた⁽⁷⁾。続けて、「翻訳する際、何かご苦勞はありますか？」と伺ってみると、「苦勞はありません。心の栄養ですから。自分の人生にと

って必要なものだと思います。上海に戻りましたら、ますます翻訳していく決心です。池田先生にもお手紙を書きました。『二十一世紀への警鐘』は10万冊以上出版されています⁽⁸⁾。中国が経済発展していく過程で環境問題が浮上してきたからだと思います。今、上海では地下鉄の駅にも先生の言葉が掲げられています。それだけ中国国民にとって池田先生の言葉は人生の指標となるものだという事でしょう」と言われていた。現在33言語、44カ国・地域で、翻訳され出版されているが、そこに携わる方の数だけの思いがあり、創業者との出会いもあるのだということを垣間見、その結果としてこれだけ世界に広まっているのだということを実感したひとときとなった。

3、4月の第1シーズンに約1700人、第2シーズンの7、8、9月に約2800人、計約4500人の方々に来場していただくことができた。中には、翻訳書籍が出版されている国に行ったことがある経験を持つ人も少なくなく、展示会場で新しい情報を得るということも数多くあった。これは、展示という形での情報発信による利点のひとつと言えるだろう。来場者の層は、まさに老若男女という言葉があてはまり、様々であった。『聖教新聞』紙上などで紹介された書籍を手に入れたらすぐに展示する等、常に内容を更新していたこともあってか、中には2回3回と足を運んで下さる方も少なくなかったようである。会場に用意しておいた感想ノートにはとくに学生たちの読書や語学・留学などへの挑戦の決意が溢れ、新入生を歓迎し、触発する展示となったと思われる。

日本の書籍はどの程度世界で翻訳されているのだろうか。その上で、これだけ幅広い言語で翻訳されている日本人はいるのだろうか。33言語、44カ国・地域で出版されている事実を持つ意味を再確認する必要がある。1300冊以上もの創業者著作の翻訳書籍が実際に集結すること自体が初めてのことであり、創業者の170を超える名誉学術称号受章の要因の一端においては、各国で翻訳出版されているこうした書籍が担う役割も大きいのではないかとこのことを感じずにはいられない。文字が違えば当然デザインの仕事も変わってくるといった、考えてみれば当たり前の装丁の違いなども見比べることができた。同じ内容の本がいくつもの言語で翻訳されているケースは多いのだが、当然その数だけの違ったデザインが存在する。内容が同じであるということは、その国・地域の書籍の内容に対するイメージを知ろうとするうえで、「装丁」がひとつの情報源となるのではないだろうか。結果的には、創業者の思想や哲学というものの世界への広がりや世界からの評価を、1300冊以上の翻訳書籍が多様な角度からリアリティを持って示してくれる展示となった⁽⁹⁾。

2. 創業者の全著作目録作成への取り組み

創業者の全著作といったとき、どのようなものがどれだけ存在するのか。著作権法によると「著作」は、(1)「思想又は感情」を表現したものであること(2)思想又は感情を「表現したもの」であること(3)思想又は感情を「創作的」に表現したものであること(4)「文芸、学術、美術又は音楽の範囲」に属するものであること、と定義されている⁽¹⁰⁾。具体的には、著者が著作したものには文芸・学術に関する著述、美術・音楽・写真・建築・彫刻などが含まれる。それを踏まえたうえで創業者の著作を挙げてみると、まず、翻訳書籍の底本ともなる単行本がある。『聖教新聞』にも多くのものが掲載され、聖教新聞社の各機関紙や創価学会の関連団体が出版している雑誌・新聞への寄稿もある⁽¹¹⁾。また、全国紙や地方紙などへの寄稿も多く、雑誌等へも幅広く寄稿している⁽¹²⁾。著名な作家の単行本に序文などを寄稿しているものもある。創業者は、とくに海外では写真家としての評価も高い。また、作詞した歌も少なくな

い。

厳密に言えば「全著作」という枠には入らないものもあるだろうし、映像や音声の存在もある。ビデオやレコードをはじめとした視聴覚資料は、文字からでは分からない創立者のしぐさや声を残すことができる媒体である。この分野は技術進歩の速度が速く、今後も新たなハードが誕生していくことだろう。どの形態で残していくかについてはさまざま模索中ではあるが、ハードの進歩に対応するために、ソフトである視聴覚資料の方にはある程度の柔軟性を持たせておく必要性が出てくるはずである。形態が違う以上、書籍と違った対応となるのは仕方がないが、創立者のことを直接知ることのできない世代に移行したときに、重要な価値を持つ資料となっていくことだろう。

海外の雑誌等への寄稿も多々あるが、これには翻訳書籍目録作成の作業で得た経験が大いに役立ってくれるはずである。とにかく膨大な量ではあるが、関係各所に協力していただきながら収集と目録化を進めているところである。

創立者は毎年1月26日の「SGIの日」に併せ、『聖教新聞』紙上において『SGIの日』記念提言を発表しており、この提言を地方紙が紹介することも少なくない⁽¹³⁾。SGI (Soka Gakkai International) は1975年1月26日に発足し、1983年の第8回「SGIの日」にはじめてSGI会長である創立者が提言を発表した。それ以来、毎年続いているものである。その内容は平和への考察であり、軍縮・人権・非暴力・対話などへの具体的な提案となっている。全著作に関して最終的には全文データベースの構築も視野には入れているが、まだ目録が調っていないため、今後の課題のひとつである。だが、枠組を狭めたうえでのデータ化は取り組みはじめており、これまでの『SGIの日』記念提言などの全文データ化は終了し、毎年一回データ化を行う流れが整っている。今年(2005年)の1月26日でSGIは30周年を迎える。今後どのように活用できるかは推測できないが、様々な研究には必要とされるはずである。

3. 170の名誉学術称号に関する記録の整理

創立者は世界各国の大学・機関から数多くの名誉学術称号を受章している。

1996年11月2日、ロシアの極東大学名誉博士称号授与式の謝辞において創立者は、イギリスの歴史家アーノルド・トインビー博士との対話についてふれている⁽¹⁴⁾。

「思い出すのは、トインビー博士との出会いである。博士の私邸で、何十時間にもわたって語り合った。博士のほうから、ご連絡をいただいた。『若き仏法の哲学者、仏法の実践者に会いたい』と⁽¹⁵⁾。博士は心臓を悪くしておられた。日本に来ることができない。そこで私のほうから、博士のもとへうかがったのである。対話の終わりに博士は言われた。『私は世界の大学から多くの名誉博士号をいただきました。一番、尊いのが教育の世界の荣誉です。私の目にまちがいがなければ、あなたの知性は将来、私以上に多くの名誉博士号を受けるにちがいありません』と⁽¹⁶⁾。

この極東大学からの授与は40番目であったが、トインビー博士の卓越した先見性を証明するかのごとく、創立者の名誉学術称号の数は、現在(2005年1月末時点)、170におよぶ⁽¹⁷⁾。

この事実を正確に後世に伝えるため、各授与式が掲載された新聞を整理し、データ化する作業に取り組んでいる。各大学からの授章の辞と、創立者の謝辞をともに整理している。また、新聞記事そのものも複製し、関連記事も保存している。この蓄積もまた、本格的な研究には必要不可欠な大きな財産になっていくであろうことを確信している。

2003年12月末から2004年1月中旬までの授章の辞と、謝辞のデータと新聞記事をもとに一冊

の本を制作した。本自体の制作期間は、先に紹介させていただいた「池田大作著作翻訳出版目録(1)」と「創立者著作『翻訳書籍1000冊』展」の作業と平行した形になった。この本は創立者の150番目の授与を記念し、『150の軌跡—名誉博士・名誉教授受章の記録—』と題して、ひとつにまとめたものである。150番目となった北極文化芸術国立大学名誉教授称号の授与が決定した段階で制作にかかり、その記事の新聞掲載を待ち、完成を迎えた。

170の名誉学術称号はその称号内容も様々であり、名誉教授が68、名誉博士が43、名誉文学博士が15と続く。これで126だが、名誉教育学博士、名誉法学博士などさまざまな形で各機関からの授与を受けられており、その種類の幅は26を数える。どの機関の名誉学術称号も「高等教育機関として、その行動を称えるべき人物」に対しての授与であるはずである⁽¹⁸⁾。その機関が存在する以上授与した事実は残るものであり、「誰に授与するか」についての判断は、それを他者から見られる側面も持つ。だからこそ授与の決定は慎重に行われ、時間をかけた調査が必要とされる。そのためかどうかは定かではないが、世界からの初受賞である1975年のモスクワ大学名誉博士号から1999年の南京大学名誉教授号までが71(98年、99年がそれぞれ12)、2000年のサンクトペテルブルク大学名誉博士号から2005年1月22日のペルー国立教育大学名誉博士号までが99となっており、とくに2000年には27が集中している⁽¹⁹⁾。この21世紀からの件数の変化も、授与式における授章の辞とそれまでの創立者の行動などを分析したときに、新しい発見があるのではないか。授章の辞でいえば、「創立者」や「SGI会長」など、授章側の呼称の仕方にも授与式によつての違いが見える。それぞれの高等教育機関が、創立者のどの部分を特に評価して称号授与の決定に至ったか、また、それが時間を重ねる中でどのように変化しているのか。この部分を探ってみることは、創立者の行動と思想・哲学の広がり認識していくために極めて重要であろう。

4. キャンパス内の名称調査

創価大学のキャンパス内には名前がつけられている場所が各所にあり、その数はキャンパスの成長に伴い、180ほどになっている⁽²⁰⁾。

しかし、その時代ごとに作られたキャンパスマップはあっても、名称をひとつの地図上に集約した形でのものは今まで存在しなかった。それは、創価大学のキャンパスが約35年の間に大きく発展し、開学当初とは地形も変わり、名前がつけられていても現在のキャンパスマップでは存在しないというケースも多くあったためであろう。しかし、それぞれの名称には由来もあり、「創価大学の歴史を残していく」という視点に立ったときには、欠かすことのできないもののひとつであった。

そのままにしておく、歴史に埋もれた名称も数多くあったかもしれない。実際、全ての名称を挙げるができる“現役学生”はいないであろう。それを知っていることで学生生活にどれだけの影響を及ぼすかは定かではないが、少なくともそのひとつひとつに創立者の学生たちや大学への思いが込められていることは確かである。その思いを次代に伝えることは大学としては必須の作業ではないだろうか。

まず、様々な時期に作られたキャンパスマップを集め、その資料をもとに一枚の地図に名称を集約させた。その上で実際にキャンパス内をまわり、当時の状況から変わっている場所などの情報を丁寧に整理した。そして、開学当初から大学に勤務されている方などに作成した地図を見ていただき、名称の由来などとともにその場所で間違いないかを確認した。一応の完成をみた地図は「キャンパス名称一覧」と名付け、創立者にも見ていただくことができた。現在は

文系校舎A棟のエレベータの脇に掛けられている。A棟はキャンパスの中でも一番古い建物であり、創価大学の今までの発展の出発点とも言える場所であるとともに、学生の出入りがキャンパスの中で一番多い場所でもある。

また、キャンパス内には創立者の揮毫も多く存在している。大学の各施設や事務所、自治会、クラブ、学生個人に贈られているものもある。各団体への揮毫だけでも写真に撮り、データで保存できればと考えている。石に彫られ「碑」となっているものは時代を超えることもできるが、サインペンなどで書かれたものの中にはすでに消えかかっているものもある。そういったものについても、修復を試み、それが無理なようであれば存在した証拠だけでも残るようにしていきたい。

5. 『新・人間革命』「創価大学」の章に関連して

創立者の代表的な著作のひとつである『新・人間革命』に、一昨年（2003年）、「創価大学」という名の章が連載された。この『新・人間革命』は、1993年から『聖教新聞』紙上で連載が続いている。その中で執筆された「創価大学」の章は、創価大学の開学前から草創期と言われる時代、そして現在までに起こった代表的な事柄を「創立者の視点」から綴られた、創価大学史にとって最重要といっても過言ではないものである。

創価大学の歴史に正面から取り組むためにまず必要なことは「創価大学」の章に取り組むことであり、これをどれだけ理解し熟知できるかが重要である。そして、章にも詳しく書かれている建学の精神や学生たちの大学建設への取り組み、創価大学の発展の軌跡をより具体的に残していくための鍵が「創価大学アーカイブズ」である。「創価大学」の章を中心とした創価大学の歴史を構築していくことは、「創価大学アーカイブズ」を発展させていくことに繋がり、今後の大学建設の土台にもなっていくことになる（21）。

当センターは「創価大学」の章への最初の本格的なアプローチとして、「創立者著作『翻訳書籍1000冊』展」に続く展示を企画した。「創価大学」の章をベースにしたこの展示のタイトルは、「創価大学の章を見る」と決定した。開催期間は、基本的には『翻訳書籍1000冊』展の期間を踏まえる予定であり、現在（2005年1月）は準備に取り掛かっている。予定している内容としては、

- ・章の中に登場する場面・場所の当時の写真
- ・当時に制作された小冊子やパンフレット
- ・当時の音（声）が残っている映像やテープ等
- ・当時を知る方々の話

などを章のストーリーに沿った形で展示していこうというものである。あくまで「創価大学」の章の流れに忠実に、様々な形でアプローチをしていくことを前提としている。章の大半が開学直後から草創期までの期間ということもあり、当時を知る方々にとっては懐かしく、現役生にとっては、章に書かれた出来事が「数十年前にこの創価大学で実際に起こった」というリアリティを感じることでできる機会となるはずである。

また、展示とリンクした形でのフォーラムの開催も企画しており、草創期の方々を中心に話していただくことを予定している。このフォーラムのタイトルは、「創価大学の章を聞く」で決定した。この企画は、展示と連動させることによって、「創価大学」の章そのものをさらに多様な角度から読み深めることにもつながるだろう。同時に、創価大学の草創期を歩まれた方々がお話しする内容は、創価大学史の中でも、非常に貴重な財産のひとつとなっていくはずである。

なぜ創価大学が誕生したのか、これから先どのような大学に成長していくべきなのか、といったようなことを、創業者と学生が共に育ててきた創価大学の歴史を振り返ることで再確認ができ、その意気が現役学生へと伝わるような展示を目指している。

おわりに

今回紹介した作業は、創業者の行動や思想の広がりが増大していく以上は今後も長く継続して行うものであり、どれも「立ち上げた」という段階である。創業者は、SGI会長として世界を舞台に行動を展開されている。その軌跡を正確に整理する作業は、到底一朝一夕にはできないのではない。その作業範囲を創価大学という枠に限定したとしても、創業者のことをより深く知っていくためにはその対象はかなり広範にならざるを得ない。

創業者は1974年に周恩来総理と会見された。1978年8月から『サンデー毎日』に寄稿され、後に単行本化された『忘れ得ぬ出会い』（毎日新聞社、1979年）のなかで、「『二十世紀の最後の二十五年は、世界にとって最も大事な時期です』淡々と語る言葉が、今も耳元に鮮やかである。（中略）訪中で推進した教育交流の一環として、私の創立した大学に、中国の若き友人が留学している。そのキャンパスに、私はその人たちに『周桜』の記念植樹をしてもらった。くる年も、くる年も、春の日溜まりのなかで桜花が咲く。それは、私にとって“一期一会”の証のように思えてならない。」との心情を述べられている⁽²²⁾。日中国交正常化に関わる重要な歴史の証拠が創価大学のキャンパスに今も残っている。

数ある翻訳書籍の中でも、最も多くの言語で出版されているのはアーノルド・トインビー博士との対談集『二十一世紀への対話』（文藝春秋、1975年）であり、それは第一部第一章「人間はいかなる存在か」から第三部第三章「善悪と倫理的実践」まで広範な内容の対談になっている。『忘れ得ぬ出会い』の中で創業者は、「思えばあの対談は、博士の研究の生涯が、まさに最後の燃焼に向かっていった時、未来に警鐘をとどめようとの共通意志から企てられたものであった。私の胸には、対談の冒頭に語調強く言われた博士の言葉が乱鐘のように湧き響き、力づけてくれる。『やりましょう！二十一世紀の人類のために、語り継ぎましょう』」と、思い出を綴られている⁽²³⁾。この対談集は30年前に出版され、現在では24言語へと翻訳され出版されている⁽²⁴⁾。この『二十一世紀への対話』がトインビー博士の最晩年の著作となり、創業者はこの出会いの後、世界中の数多くの識者との対話を展開されてきた。

この『忘れ得ぬ出会い』には、周総理やトインビー博士のように世界を舞台とする識者の方々だけでなく、ある無名の町医者や初老の駅員など、ありとあらゆる人々との大切な“一期一会”を紹介されている。この本のまえがきの中で創業者は、「私はそれらの出会いを通して、多くを学んだ。また一つ一つの言葉をかみしめた。（中略）回数に限りもあり、まだ書きたい人がいる。また今もそうした出会いがつついている。私は、そうしたすべてを私の心の宝としながら（中略）毎日の生活のなかに、人間と人間を結ぶ平和のオアシスを広げゆく出会いをどこまでも、と念じている」と書かれている。

その言葉どおりの実践の結果、世界中に友人が生まれ、33言語以上で書籍が出版され、世界のいたるところで創業者の行動と思想が高く評価される時代が到来した。世界への道を拓き、人間と人間を結び続けられている創業者は、青年に次の時代を託され、その成長に大きな期待を寄せられている。その過程における創業者の実践行動、学生との一対一の出会いなどをより正確に残し、次代の青年にも伝えていくことが重要であると捉えている。当センターの蓄積した資料がいずれ、「創価教育とはどういうものなのか？」という創価の淵源でもある命題を、

より多くの言葉で表現し、伝え残すための一端を担っていくことであろう。

(注)

(1) 現在、世界の知性による本格的な池田研究が展開されはじめている。中国・北京大学の「池田大作研究会」。インド・ガンジー非暴力開発センターの「池田価値創造センター」。アルゼンチン・ローマス・デ・サモラ大学の「池田哲学普及常設委員会」など、池田研究を主目的とした機関が各地に設立され活動を開始しており、とくに中国はいくつもの大学が取り組みをはじめている（本号、高橋強論稿等を参照のこと）。当センターは、世界に広がりつつある池田研究をつなぐ拠点として、また、日本だからこそ可能な基礎研究を行う機関となることを目指して、創価大学で地道な蓄積を開始している。

(2) この詳細は、以下の通りである。

イタリア語、インドネシア語、ウルドゥー語、英語、オランダ語、オリア語、クメール語、シンハラ語、スウェーデン語、スペイン語、スワヒリ語、セルビア語、タイ語、タミール語、チェコ語、中国語、デンマーク語、ドイツ語、トルコ語、ネパール語、ハンガリー語、ハンブル、ヒンディー語、フィリピン語、フランス語、ブルガリア語、ベトナム語、ベンガル語、ポーランド語、ポルトガル語、マレー語、モンゴル語、ロシア語の33言語。

アメリカ、アルゼンチン、イギリス、イタリア、インド、インドネシア、ウルクアイ、オランダ、カナダ、韓国、カンボジア、キューバ、ケニア、シンガポール、スイス、スウェーデン、スペイン、セルビア・モンテネグロ、タイ、台湾、チェコ、中国、チリ、デンマーク、ドイツ、トルコ、日本、ネパール、ハンガリー、バングラデシュ、フィリピン、ブラジル、フランス、ブルガリア、ベトナム、ベネズエラ、ペルー、ポーランド、香港、マレーシア、メキシコ、モナコ、モンゴル、ロシアの44カ国・地域。

(3) 『創価教育研究』第3号「創価教育研究センター所蔵 池田大作著作翻訳出版目録(1)」

『創価教育研究』第4号「創価教育研究センター所蔵 池田大作著作翻訳出版目録(2)」参照。

(4) 当センターが所蔵している中で、特に初期のものを紹介させていただく。

Lectures on Buddhism: Vol. I, The Seikyo Press, 1962

The human revolution: Vol. I, The Seikyo Press, 1965

(5) 有吉佐和子『複合汚染その後』(潮出版社、1977年)、井上靖『おろしや国酔夢譚』(文藝春秋、1974年)、松下幸之助『私の夢・日本の夢・21世紀の日本』(PHP研究所、1977年)、毛利衛『毛利衛、ふわっと宇宙へ』(朝日新聞社、1992年)など。

(6) 日本文学研究、翻訳専門家。1955年、北京大学日本語科卒業。元北京大学教授。北京大学日本語科の主任、アジア・アフリカ研究所副所長、日本研究センター常任副主任などを歴任。石川啄木、小林多喜二、島崎藤村、田宮虎彦、陳瞬臣などの著作を翻訳。

(7) 創立者は1974年5月に初めて訪中し、中日友好協会主催の歓迎宴の席上、北京大学への図書寄贈と日本への青年・学生20人の招待を提案。同年12月の第二次訪中のさいに、北京大学への図書5000冊贈呈式が行われた。

中国語版『私の履歴書』は、1984年に吉林人民出版社から出版された。

(8) 『二十一世紀への警鐘』(読売新聞社、1984年)。ローマ・クラブの創始者であるアウレリオ・ペッチェイ博士との対談集。同書の英語版、*Before it is too late*と同時に翻訳・出版が進められた。現在では15言語で翻訳されている。

(9) 『聖教新聞』2004年7月25日付に掲載された香港のブック・フェアの記事を抜粋して紹介する。

【香港コンベンション・エキシビション・センターで21日に開幕した「2004年香港ブック・フェア」(主催・香港貿易発展局)に、「対話の力ー池田大作コーナー」が設けられ、反響を呼んでいる。

本年で15回目を迎える同ブック・フェアは、世界最大規模を誇り、香港内外から367の出版社・機構

が参加している。

“池田大作コーナー”は、会場のほぼ中央、香港最大手の出版社である天地圖書の区画に。一人の作者のコーナーが設けられるのは、日本人初である。

ここに展示されているのは、香港はもとより中国各地、台湾、シンガポール、マレーシアで刊行された80種類の池田SGI会長の中国語書籍。対談集から詩集、散文集、童話なども。

とりわけ、香港のマスコミでも話題を呼んだ『旭日の世紀を求めて』（金庸対談）、『20世紀の精神の教訓』（ゴルバチョフ対談）、ベストセラーとなった『社会と宗教』（ウィルソン対談）、『青春対話』などが、注目を集めている。

初日、同コーナーを訪れた香港出版協会の李祖澤会長（中国政治協商会議全国委員）は、SGI会長の著作の高い啓発性を評価。「いずれも心に響く良書であることは、出版界でいつも話題です。そのいくつかは、私の“座右の書”にもなっています」と述べた。

また、香港大学の簡麗冰博士（元・同大学図書館長）は「池田先生の作品は、学生からの人気が高い。精神が大いに触発されるからではないでしょうか」と。

こういった記事はいくつかあるが、実物の翻訳書籍に触れることによって、よりリアリティを感じることができた。

(10) 文化庁ホームページ (<http://www.bunka.go.jp/>) 参照。

(11) 小学生文化新聞、中学生文化新聞、高校新報、創価新報、潮、大白蓮華、パンプキン、灯台、第三文明、グラフSGIなど。

(12) 創立者が今までに寄稿された新聞で当センターが把握しているものを以下で紹介したい。なお、雑誌については種類が多いので連載が掲載された誌名をいくつか紹介させていただく。

新聞は、会津新聞、青森新聞、秋田魁新報、朝日新聞、天草毎日新聞、伊勢新聞、いわき民報、岩手日日新聞、岩手日報、愛媛新聞、大分合同新聞、大阪新聞、大崎タイムズ、大館新報、岡山日日新聞、沖縄タイムズ、沖縄パシフィックプレス、鹿児島新聞、鹿児島新報、神奈川新聞、河北新報、神静民報、紀伊民報、北日本新聞、岐阜新聞、岐阜日日新聞、京都新聞、釧路新聞、熊本日日新聞、県民福井、高知新聞、神戸新聞、今日新聞、埼玉新聞、佐賀新聞、札幌タイムズ、山陰中央新聞、山陰中央新報、サンケイ新聞、産経新聞、山陽新聞、四国新聞、静岡新聞、信濃毎日新聞、下越新聞、下野新聞、ジャパンタイムズ、週刊アキタ、週刊読書人、荘内日報、上毛新聞、常陽新聞、杉並新聞、須坂新聞、千葉日報、中外日報、中国新聞、中日新聞、東奥日報、東京新聞、東京タイムズ、徳島新聞、富山新聞、長岡新聞、長崎新聞、名古屋タイムズ、奈良新聞、奈良日日新聞、新潟日報、西日本新聞、日刊新愛媛、日本海新聞、日本金融通信、日本経済新聞、函館新聞、東愛知新聞、福井新聞、福島民報、福島民友、文化創造、北陸中日新聞、北海タイムズ、北海道新聞、北国新聞、毎日新聞、三重新聞、南紀州新聞、南日本新聞、宮崎日日新聞、室蘭民報、盛岡タイムズ、八重山毎日新聞、八幡浜新聞、山形新聞、山口新聞、山梨新報、山梨日日新聞、夕刊フクニチ、米沢日報、読売新聞、琉球新報、和歌山新聞、和歌山新報。

雑誌は、週刊朝日、週刊読売、サンデー毎日、財界九州、女性自身、主婦と生活、マイライフ、ダイヤモンドセールスマネジャーなど。雑誌への寄稿の数だけでも優に500を超えている。

(13) 中外日報、ジャパンタイムズ、山形新聞、琉球新報、今日新聞、長岡新聞、荘内日報など。

(14) イギリスの歴史家。オックスフォード大学研究員を経て、第一次大戦には外務省情報部に勤務、パリ講和会議にはイギリス代表団中東部員。ロンドン大学教授、王立国際問題研究所研究部長、ロンドン大学国際関係史教授を歴任した。その間に外務省調査部長を務める。世界政府の創設を主唱し、その大著*A study of history*で、総合的な観点から全人類史に新しい展望をひらいた。

(15) 『創価教育研究』第3号、北政巳「『21世紀への対話』に臨んだトインビー博士の歩んだ道」参照。

(16) 『聖教新聞』1996年1月3日付3面より抜粋。

(17) 表A参照。

- (18) それぞれの機関が創立者に称号を授与する際の受章の辞で、創立者の実践や世界からの評価について、また、授与に至った経緯などが話される。そのひとつの例として、1994年6月15日のグラスゴー大学（イギリス）の名誉博士号授与式においてのマンロー評議会議長の「推挙の辞」の内容を、『聖教新聞』1994年6月17日付2面より抜粋して紹介させていただく。

【議長に申し上げます。評議会の名をもって、私は、評議会が推挙するこの人物に対する名誉博士の学位授与を要請いたします。

1971年春、東京郊外・八王子の緑の丘陵に新しい大学、創価大学が開学され、最初の学生を受け入れました。一見すると創価大学は同時期にできた他の大学と違いないように見えるかもしれませんが、しかし、創価大学を他の新設大学から際立たせているものは、創立者・池田氏のビジョンと着想であります。創立者・池田氏は、その価値観と目的意識により、同大学を、年月をかけて、現在の日本で、教育上、最も進歩的な大学にされました。

（中略）第二次大戦の中で成人になられた池田氏の人生の方向を決定づけたのは、1947年、戸田城聖氏と出会い、氏の弟子になられたことでもあります。戦争の傷あとのいまだ癒えぬころでありました。

（中略）1960年、池田氏は、戸田氏を継ぎ、第三代創価学会会長に就任。教育・文化を革新する画期的な時代を開始されました。そのなかで、幼稚園から中学・高等学校まで、日本の主要都市に開校。また、より高度の教育のために創価大学を創立されたのであります。

芸術の分野では、63年に民音を創立されました。民音は世界と日本の文化交流を促進するもので、（英国の）ロイヤル・オペラや、ロイヤル・バレエ団、その他を招へいしています。83年には、東京富士美術館を創大に隣接して開館されています。グラスゴー大学にあるハンテリアン美術館と同様に、西洋・日本の素晴らしいコレクションを学者や学生、来場者に公開しています。

（中略）1970年から1980年にかけて、創価学会は世界的団体となり、初代SGI会長となった池田大作氏は世界平和に身を捧げられています。国連の理想と活動への支援によって、国連平和賞、国連難民高等弁務官事務所からの人道賞をはじめ、多くの政府や団体からおびただしい賞をもって評価されています。

教育の分野においても、池田氏は同じ国際主義の精神を示され、世界を広く旅して、主要な大学で講演。現代の社会、政治、環境の問題に関し、仏教者の視点から論じておられます。氏の奨励により、創価大学は、日本の大学の中で最も海外に開かれた大学のひとつとなり、カリフォルニアにキャンパスをもち、パリにヨーロッパ語学研修センターを開設し、グラスゴー大学を含め、世界の約40の大学と学術交流を推進しています。

総長に申し上げます。池田氏は大きな宗教団体の長であり、国際的な人道主義者であり、世界の文化界の重要な人物であります。そのうえで本日は、基本的に氏を教育者として、また、我がグラスゴー大学の友人として、学位の授与を求め功績をたたえたいと思うものであります。

（中略）私人としての池田大作氏についても述べるべき点は多くあります。池田大作氏は、優秀な学者であり、多くの哲学探究の書の著者であり、特に風景をとらえる、優れたアマチュア写真家であります。また、若いころから、内面の精神と心情を詩歌という静謐な芸術に表現されてきました。

（中略）総長。ここにおいて私は池田大作氏に、名誉博士号を授与されるよう要請いたします。】

- (19) 表B参照。

(20) 宝来の道、春風の道、暁の道、桜花の道、栄光門、文学の池、満天の庭、滝山寮、学修館などのような名称がキャンパス内の様々な場所に命名されている。

(21) 『創価教育研究』第4号、中村顕一郎「大学アーカイブズにおける学生の位置づけ—創価大学の学生出版物を手がかりにして」参照。

(22) 28—30ページ。

(23) 218—219ページ。

(24) 1975年に日本語で発刊され、次に英語版が1976年にKodansha International Ltd.より発刊された。

創立者研究へのアプローチ—創立者の海外書籍収集を中心に—

その2つをはじめとして、中国語、ドイツ語、ハンガル、イタリア語、フランス語、ポルトガル語、チェコ語、ヒンディー語、など24言語で翻訳されている。

表A 創立者受章の名誉学術称号一覧

No.	受章年月日	授章大学・学位	国
1	1975.5.27	モスクワ大学名誉博士	ロシア(旧ソ連)
2	1981.4.10	国立サンマルコス大学名誉教授	ペルー
3	1981.5.21	ソフィア大学名誉博士	ブルガリア
4	1984.6.5	北京大学名誉教授	中国
5	1984.6.9	復旦大学名誉教授	中国
6	1987.2.10	サントドミンゴ国立自治大学名誉教授	ドミニカ共和国
7	1990.3.1	ブエノスアイレス大学名誉博士	アルゼンチン
8	1990.3.10	グアナフアト大学最高名誉博士	メキシコ
9	1990.11.3	武漢大学名誉教授	中国
10	1991.1.30	マカオ東亜大学(現マカオ大学)名誉教授	中国(マカオ)
11	1991.4.21	フィリピン大学名誉法学博士	フィリピン
12	1991.5.15	バルレモ大学名誉博士	アルゼンチン
13	1992.1.30	香港中文大学最高客員教授	中国(香港)
14	1992.6.24	アンカラ大学名誉博士	トルコ
15	1992.10.14	中国社会科学院名誉研究教授	中国
16	1992.12.22	ナイロビ大学名誉文学博士	ケニア
17	1993.2.11	リオデジャネイロ連邦大学名誉博士	ブラジル
18	1993.2.17	国立ローマス・デ・サモラ大学名誉博士	アルゼンチン
19		国立ローマス・デ・サモラ大学法学部名誉教授	
20	1993.2.19	国立コルドバ大学名誉博士	アルゼンチン
21	1993.2.22	国立アスンシオン大学哲学部名誉博士	パラグアイ
22	1993.2.26	サンパウロ総合大学名誉客員教授	ブラジル
23	1993.3.1	パラナ連邦大学名誉博士	ブラジル
24	1993.3.3	デル・バリエ大学名誉博士	ボリビア
25	1993.11.4	深圳大学名誉教授	中国
26	1994.1.20	新疆ウイグル自治区博物館名誉教授	中国
27	1994.5.19	国際大学名誉博士	ロシア
28	1994.6.1	ボローニャ大学博士	イタリア
29	1994.6.15	グラスゴー大学名誉博士	イギリス
30	1994.8.12	新疆大学名誉教授	中国
31	1994.11.22	廈門大学名誉教授	中国
32	1995.9.30	ノース大学名誉教育学博士	南アフリカ
33	1995.11.2	トリバン大学名誉文学博士	ネパール
34	1995.11.14	マカオ大学名誉社会科学博士	中国(マカオ)
35	1996.3.14	香港大学名誉文学博士	中国(香港)
36	1996.4.2	新疆大学名誉学長	中国
37	1996.6.8	デンバー大学名誉教育学博士	アメリカ
38	1996.6.25	ハバナ大学名誉文学博士	キューバ
39	1996.8.29	ガーナ大学名誉法学博士	ガーナ
40	1996.11.2	極東大学名誉博士	ロシア
41	1996.11.17	中山大學名誉教授	中国
42	1997.2.20	吉林大学名誉教授	中国
43	1997.3.18	デ・ラ・サール大学名誉人文学博士	フィリピン
44	1997.5.5	ケラニア大学名誉文学博士	スリランカ
45	1997.5.12	上海大学名誉教授	中国
46	1997.10.6	内モンゴ大学名誉教授	中国
47	1997.11.8	モンゴル国立大学名誉人文学博士	モンゴル
48	1998.2.11	マニラ市立大学名誉人文学博士	フィリピン
49	1998.3.18	モロン大学名誉博士	アルゼンチン
50	1998.4.2	ロシア国立高エネルギー物理研究所名誉博士	ロシア
51	1998.4.29	リオデジャネイロ州立大学名誉博士	ブラジル
52	1998.5.15	慶熙大学名誉哲学博士	韓国
53	1998.7.4	忠清大学名誉教授	韓国
54	1998.7.24	リカルド・バルマ大学名誉博士	ペルー
55	1998.7.24	教育学博士協会名誉博士	ペルー
56	1998.11.1	延辺大学名誉教授	中国

No.	受章年月日	授章大学・学位	国
57	1998.11.25	南開大学名誉教授	中国
58	1998.11.30	北パラナ大学名誉博士	ブラジル
59	1998.12.13	デリー大学名誉文学博士	インド
60	1999.1.15	フローレス大学名誉博士	アルゼンチン
61	1999.4.5	四川大学名誉教授	中国
62	1999.4.17	国立フェデリコ・ビヤリアル大学名誉博士	ペルー
63	1999.5.17	国立済州大学名誉文学博士	韓国
64	1999.6.12	サンタクルス・デ・ラ・シエラ大学名誉博士	ボリビア
65	1999.7.24	東北大学名誉教授	中国
66	1999.8.24	キルギス東洋言語文化大学名誉教授	キルギス
67	1999.9.4	国立ペルー中央大学名誉博士	ペルー
68	1999.9.10	湖南師範大学名誉教授	中国
69	1999.10.25	国立ローマス・デ・サモーラ大学社会学部名誉教授	アルゼンチン
70	1999.10.27	国立コマウエ大学名誉博士	アルゼンチン
71	1999.12.16	南京大学名誉教授	中国
72	2000.1.6	サンクトペテルブルク大学名誉博士	ロシア
73	2000.1.15	デラウェア大学名誉人文学博士	アメリカ
74	2000.1.18	ニューヨーク市立大学クイーンズ・カレッジ名誉人文学博士	アメリカ
75	2000.1.28	グアム大学名誉人文学博士	アメリカ
76	2000.2.5	アンヘレス大学名誉人文学博士	フィリピン
77	2000.2.8	中央民族大学名誉教授	中国
78	2000.2.19	広東外語外貿大学名誉教授	中国
79	2000.2.27	国立ノルデステ大学名誉博士	アルゼンチン
80	2000.3.10	東北師範大学名誉博士	中国
81	2000.3.21	国立ヤクーツク大学名誉教授	ロシア・サハ共和国
82	2000.4.17	ラテン・アメリカ工科大学名誉博士	エルサルバドル
83	2000.4.22	内モンゴ芸術学院最高名誉教授	中国
84	2000.4.24	サンسكريット教育学院名誉博士	インド
85	2000.5.5	モンゴル文学大学名誉学長	モンゴル
86	2000.5.11	北京行政学院名誉教授	中国
87	2000.6.27	雲南大学名誉教授	中国
88	2000.8.25	華南師範大学名誉教授	中国
89	2000.8.26	ブンデルカンド大学名誉文学博士	インド
90	2000.9.1	スリア大学名誉博士	ベネズエラ
91	2000.9.13	パナマ大学名誉博士	パナマ
92	2000.10.15	ブンデルカンド大学社会学部終身名誉教授	インド
93	2000.11.5	サイアム大学名誉行政学博士	タイ
94	2000.11.13	トンガ国立教育大学・科学技術大学教育学名誉教授	トンガ
95	2000.11.24	シドニー大学名誉文学博士	オーストラリア
96	2000.11.29	国立アトラ大学名誉文学博士	マレーシア
97	2000.12.7	香港中文大学名誉社会科学博士	中国(香港)
98	2000.12.25	モンゴル国立文化芸術大学名誉博士	モンゴル
99	2001.1.20	ブルバンチャル大学名誉文学博士	インド
100	2001.2.16	広東省社会科学院名誉教授	中国
101	2001.4.2	西北大学名誉教授	中国
102	2001.4.28	安徽大学名誉教授	中国
103	2001.5.8	カルロス・アルビズ大学名誉行動科学博士	米・プエルトリコ
104	2001.5.14	カラコルム大学名誉博士	モンゴル
105	2001.6.1	福建師範大学名誉教授	中国
106	2001.6.14	華僑大学名誉教授	中国
107	2001.7.14	暨南大学名誉教授	中国
108	2001.7.19	北マリアナ大学名誉教授	米・北マリアナ諸島連邦
109	2001.10.5	蘇州大学名誉教授	中国
110	2001.10.23	遼寧師範大学名誉教授	中国
111	2001.10.27	南フィリピン大学名誉人文学博士	フィリピン
112	2001.11.18	広州大学名誉教授	中国
113	2001.12.8	慶州大学名誉教授	韓国

創業者研究へのアプローチ—創業者の海外書籍収集を中心に—

No.	受章年月日	授章大学・学位	国
114	2001.12.15	国立昌原大学名誉教育学博士	韓国
115	2001.12.20	国際カザフ・トルコ大学名誉教授	カザフスタン
116	2002.2.15	サンティアゴ工科大学名誉博士	ドミニカ共和国
117	2002.2.20	カマル・アッディーン・ヒフザート記念国立美術大学名誉教授	ウズベキスタン
118	2002.3.9	遼寧社会科学院首席研究教授	中国
119	2002.3.14	アラネタ大学名誉人文学博士	フィリピン
120	2002.3.19	王立ブノンペン大学名誉教授	カンボジア
121	2002.4.1	遼寧大学名誉教授	中国
122	2002.4.7	モアハウス大学名誉人文学博士	アメリカ
123	2002.4.21	青島大学名誉教授	中国
124	2002.4.27	チャトラパティ・シヤフジ・マハラジ大学名誉文学博士	インド
125	2002.5.18	ケニヤッタ大学名誉人文学博士	ケニア
126	2002.5.25	黒龍江省社会科学院名誉教授	中国
127	2002.6.8	モスクワ大学名誉教授	ロシア
128	2002.6.23	南京師範大学名誉教授	中国
129	2002.6.28	徐羅伐大学名誉教授	韓国
130	2002.8.26	ヒマーチャル・プラデーシュ大学名誉文学博士	インド
131	2002.9.28	中国人民大学名誉教授	中国
132	2002.10.6	中国科学技術大学名誉教授	中国
133	2002.11.2	浙江大学名誉教授	中国
134	2002.11.20	シヒボトグ法律大学名誉博士	モンゴル
135	2002.11.28	キエフ国立貿易経済大学名誉博士	ウクライナ
136	2002.12.2	東亜大学名誉哲学博士	韓国
137	2002.12.12	上海外国語大学名誉教授	中国
138	2002.12.21	上海社会科学院名誉教授	中国
139	2003.1.18	パラティダッサン大学名誉文学博士	インド
140	2003.2.23	国立ビウラ大学名誉博士	ペルー
141	2003.3.24	中国文化大学名誉哲学博士	台湾
142	2003.4.15	大連外国語学院名誉教授	中国
143	2003.4.19	コロンビア・デル・バラグアイ大学名誉社会学博士	パラグアイ
144	2003.9.27	国立ホルヘ・バサドレ・グロマン大学名誉博士	ペルー
145	2003.10.8	西北師範大学名誉教授	中国
146	2003.10.18	光州女子大学名誉教授	韓国
147	2003.10.24	上海交通大学名誉教授	中国
148	2003.12.16	チャップマン大学名誉人文学博士	アメリカ
149	2003.12.24	肇慶学院名誉教授	中国
150	2004.1.10	北極文化芸術国立大学名誉教授	ロシア・サハ共和国
151	2004.2.24	ラビンドラ・バラティ大学名誉文学博士	インド
152	2004.2.28	ミネラルエリア大学人文学名誉教授	アメリカ
153	2004.3.19	国家検察官学院名誉教授	中国
154	2004.3.29	屏東科技大学名誉農学博士	台湾
155	2004.4.1	プリアート国立大学名誉教授	ロシア・プリアート共和国
156	2004.4.14	パラナ州立ロンドリーナ大学名誉博士	ブラジル
157	2004.5.5	サン・フランシスコ・ハビエル・デ・チュキサカ大学名誉博士	ボリビア
158	2004.5.29	石油大学名誉教授	中国
159	2004.6.6	キャピトル大学名誉人文学博士	フィリピン
160	2004.6.26	上海杉達学院名誉教授	中国
161	2004.7.22	ヨルダン大学名誉人文学博士	ヨルダン・ハシム王国
162	2004.9.20	グアダハラ大学名誉博士	メキシコ
163	2004.9.26	福建社会科学院名誉教授	中国
164	2004.10.3	長春大学名誉教授	中国
165	2004.10.16	曲阜師範大学名誉教授	中国
166	2004.11.4	オシ国立大学名誉教授	キルギス
167	2004.11.23	百済芸術大学名誉教授	韓国
168	2004.12.17	オトモンテンゲル大学名誉博士	モンゴル
169	2005.1.21	北マリアナ大学名誉学長	米・北マリアナ諸島連邦
170	2005.1.22	エンリケ・グスマン・イ・バイエ国立教育大学名誉博士	ペルー

表B

受章した名誉学術称号の数

No.	学位名	受章数
1	名誉教授	68
2	名誉博士	43
3	名誉文学博士	15
4	名誉人文学博士	14
5	名誉学長	3
6	名誉教育学博士	3
7	名誉哲学博士	3
8	名誉社会科学博士	2
9	名誉法学博士	2
10	教育学名誉教授	1
11	最高客員教授	1
12	最高名誉教授	1
13	最高名誉博士	1
14	社会学部終身名誉教授	1
15	社会学部名誉教授	1
16	首席研究教授	1
17	人文学名誉教授	1
18	哲学部名誉教授	1
19	博士(ポーロニャ大学)	1
20	法学部名誉教授	1
21	名誉客員教授	1
22	名誉行政学博士	1
23	名誉研究教授	1
24	名誉行動科学博士	1
25	名誉社会学博士	1
26	名誉農学博士	1

年ごとの受章数

西暦	受章数
1975	1
1981	2
1984	2
1987	1
1990	3
1991	3
1992	4
1993	9
1994	6
1995	3
1996	7
1997	6
1998	12
1999	12
2000	27
2001	17
2002	23
2003	11
2004	19
2005	2

※ 表A、表Bの内容は2005年1月現在。